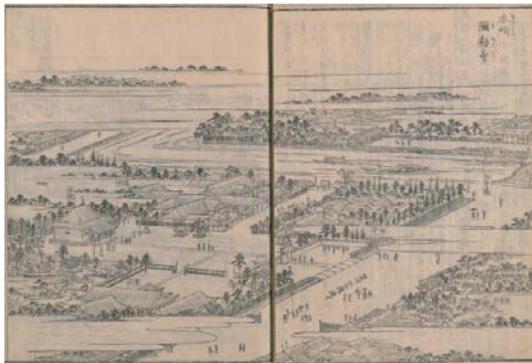




## 『江戸名所図会』に描かれた本所弥勒寺 ―「石橋を 数えて渡ろう 雪旦さん」―

■『江戸名所図会』、その功は 絵にあり

『江戸名所図会』は、江戸の地誌の中で最も有名なもののひとつで、江戸神田雉子町町名主斎藤家三代、斎藤長秋・県磨・月岑により編纂され、天保五年（一八三四）正月、孫の代月岑によって刊行されました（国立国会図書館所蔵、請求記号八三九一五七）。滝沢馬琴の文章によれば、当時、かなりの売れ行きだったらしく、刊行直後、すぐに売れ切れてしまったのだそうです。何と（！）平成の現在でも版を重ねており、市古夏生・鈴木健一校訂『新訂江戸名所図会』（ちくま学芸文



『江戸名所図会』「本所弥勒寺」（現・立川一丁目4-13）

庫）として刊行されています。さて、『江戸名所図会』はなぜこれだけ高く評価されたのか？ 馬琴によると「編者の功は四分、絵師の功は六分だろう」という見立てです。『江戸名所図会』には、その名の通り「図会」「会」「絵」、たくさん

さんの詳細を極めた挿絵が付いています。

■『江戸名所図会』絵師長谷川雪旦のひととなり

『江戸名所図会』の挿絵を担当した絵師が長谷川雪旦です。本姓を後藤、名を宗秀、俗称を茂右衛門と称しました。安永七年（一七七八）生まれ、天保一四年（一八四三）正月二十八日に六六歳で亡くなっています。雪旦は、漢画のみならず、琳派や四条派の絵など、多様な画風をひろく学びました。唐津藩小笠原家の御抱絵師となった以後、斎藤家から『江戸名所図会』の挿絵を依頼されました。

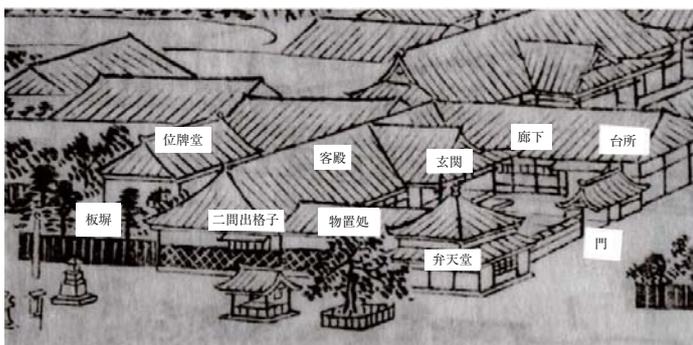
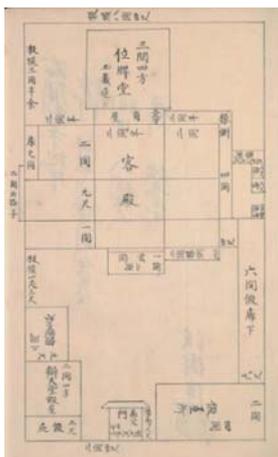
雪旦が『江戸名所図会』の挿絵をどのように描写していたのか、それを窺わせるエピソードがあります。……ある日、雪旦が、『江戸名所図会』の挿絵作成のため、鰻屋に入り周囲

を写生していました。すると、その晩にたまたま鰻屋に泥棒が入り、昼間に鰻屋にいた雪旦が怪しい、ということになりました。雪旦はそのため事情を聞かれましたが、絵師だということことがわかり疑惑が晴れました。また、墨田区の関連でいえば、本所の五百羅漢を描くために、堂内に宿泊までした、というエピソードも残されています。

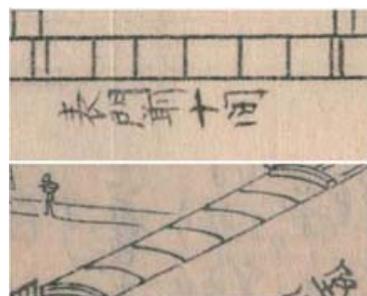
■『江戸名所図会』「本所弥勒寺」挿絵の検討

それでは、雪旦が『江戸名所図会』の挿絵をどのように描いていたのか、現・墨田区に所在する寺院の絵を例にみてみましょう。『江戸名所図会』

「本所弥勒寺」という挿絵です（全景、前述の図版）。この挿絵と、弥勒寺の作事絵図面（国立国会図書館所蔵「諸宗作事図帳」請求番号八一六―六）の両者を比較してみましよう。すると、寺院の部分を実に細かく描きこんでいることがわかります。また、正門の石橋の石材の

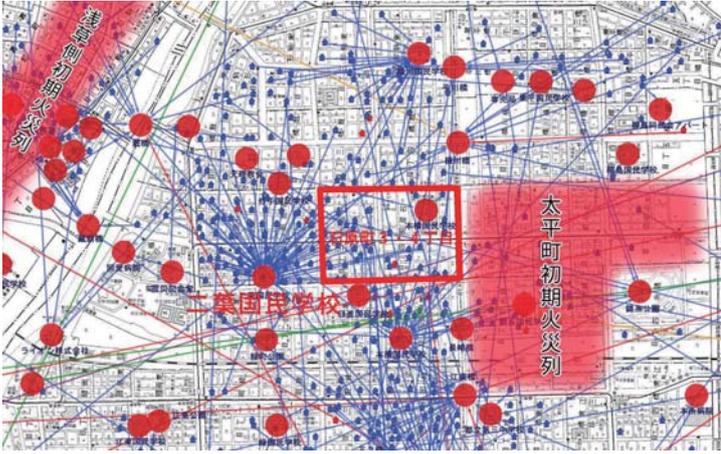


本所弥勒寺の子院宝樹院。作事絵図面の宝樹院の図面(上)と『江戸名所図会』の宝樹院。建物を丹念に描いている。



本所弥勒寺の石橋。作事絵図面(上)と『江戸名所図会』。両者、石材が6つ。

数（六つ）も、そのままに描いています。このように、雪旦は対象物を正確に描写しようと努めていたことがわかります。先にご紹介した逸話も、その熱心な描写態度を物語る史料といえそうです。（墨田区文化財調査員 高尾 善希）



# 東京大空襲 その時何が起こったのか ～「いのちの被災地図」の検討から～

すみだ郷土文化資料館専門員 田中禎昭

現在、すみだ郷土文化資料館では、東京大空襲・戦災資料センターとともに、2001年に当館とNHKの調査により発見された『都内戦災殉難者霊名簿（原簿）』（以下『原簿』）の共同研究を進め、そこに記された情報を元に「いのちの被災地図」と名付けた新たな空襲被災地図の作成と分析に取り組んでいる。ここでは、そこで明らかになってきた新事実にも焦点を当て、空襲当日に何が起こっていたのか、研究成果の一端を紹介したい。

## 「いのちの被災地図（部分）」

青い家マーク：犠牲者の住居・赤い丸印：犠牲者の死亡場所

■『原簿』と「いのちの被災地図」  
東京都慰霊協会は、1951（昭和26）年から1955（昭和30）年にかけて、遺族の申告に基づく情報と、空襲直後に確認された犠牲者の着衣に縫い付けられた名札の調査結果をもとに、約3万人の犠牲者氏名を記した『都内戦災殉難者霊名簿』を作成した。この『霊名簿』の記

録過程で作成された「草稿」に当たる帳簿が、私たちの分析対象となっている『原簿』である。『原簿』には犠牲者の住所と死亡場所が記されている。そこで私たちは、『原簿』に記された住所と死亡場所を地図上に落とし、両地点を矢印で結んだ「いのちの被災地図」を作成し、空襲犠牲者の避難の傾向を探ることとした。

「被災地図」上の住所と死亡場所を結び青い矢印からは、空襲当日における犠牲者の避難の方位と直線距離を読み取ることができる。そこで地図上の計測により、避難距離（m）と方位（北・北東・東・南東・南・南西・西・北西の8方位角）を算出し、その情報を元に犠牲者の避難傾向を数量的に把握し、それを通して空襲犠牲者の避難行動と空襲火災の因果関係について町別に検討を試みた。

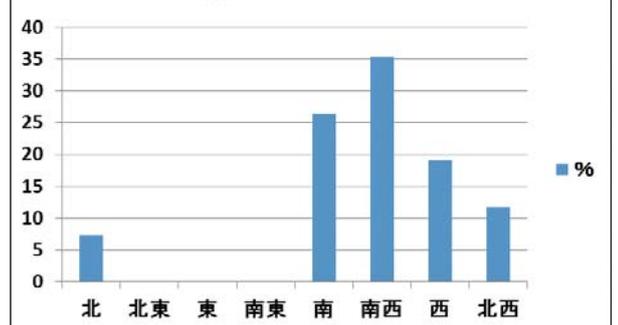
## ■初期火災域と犠牲者の避難傾向の相関性

たとえば石原町三・四丁目に住居していた犠牲者の避難方位を見ると、住居から南西（35.3%）・南（26.5%）・西（19.1%）が多く、北東・東・南東側への避難者は0%となつて

いる。実は被災地全域では南東（24.0%）・南（19.5%）に避難した人が最も多く、これは空襲当日に北西寄りの強風が吹いていたため、風下の南東方面に人々が避難した傾向が現れている。しかし石原町三・四丁目の住民の多くは、それに反して町の南東・東方面へは避難しなかった。その背景として、町の東・南東側一帯に住民の避難を抑制する条件Ⅱ大規模な火災域（火の壁）の発生が想定できるだろう。「警視庁消防部記録」（昭和20年3月18日付）によれば、石原町の東隣に位置する太平町（江東橋一帯に空襲開始（午前0時7分）直後の0時8分～11分に大規模な火災が発生したと記録されており、「被災地図」の分析結果を裏付けている。また避難距離（m）を見ると、全体では自宅から死亡場所までの直線距離は200～300m代の至近距離が多く、500m以上の遠距離避難者は全体の27%にとどまる。しかし多数の犠牲者を出したことが知られる菊川橋では、橋で亡くなった人々の約半数の54%が500m以上の遠方から避難してきた人々であった。これは菊川橋の延焼がかなり遅れ、周囲の町だけではな

く遠くからの避難者が多数橋に集まり、周囲を火に囲まれ逃げ道を失い、亡くなった人々が多かった事実を示している。「被災地図」の分析を通して、私たちは犠牲者の避難行動を火災の延焼過程と関連させながら、空襲被害拡大のプロセスについて把握できるようになった。今後、この研究を被災地域に広げ、証言、消防の記録、当日の風系（火災の流れ）調査記録などの関連資料と照合させつつ、町というミクロな単位での空襲被害の実相を解明していきたいと考えている。（平成27年度前期すみだ地域学セミナー講演より）

本所区石原町3・4丁目住民の避難方位



く遠くからの避難者が多数橋に集まり、周囲を火に囲まれ逃げ道を失い、亡くなった人々が多かった事実を示している。「被災地図」の分析を通して、私たちは犠牲者の避難行動を火災の延焼過程と関連させながら、空襲被害拡大のプロセスについて把握できるようになった。今後、この研究を被災地域に広げ、証言、消防の記録、当日の風系（火災の流れ）調査記録などの関連資料と照合させつつ、町というミクロな単位での空襲被害の実相を解明していきたいと考えている。（平成27年度前期すみだ地域学セミナー講演より）